

出張講座は、年に10回程度、地元の小学校だけでなく中学や高校にも広がり、もう20年近く続いている。

きっかけは、1996年に松江市が文部科学省のエイズ教育推進地域事業の指定を受けたこと。同校はルーミアのエイズ孤児への募金などに始まり、地元の学校へのエイズ教育の普及に活動を広げていった。そうした長年の活動の成果が認められ、2014年10月には、女性の可能性を広げる取り組みを行う団体や個人に贈られる「津田梅子賞」を受賞した。JICAの出前講座を活用して協力隊経験者の体験談を聞いたり、世界の実情や日本の現状について広く学習する合宿型の研修を開いたり、国際協力に積極的だ。

授業はもちろん、文化祭や体育祭、その他さまざまな学校行事の中核となり、何かと忙しい生徒会のメンバー。それでもその合間を縫って、自主的に活動が続けてきたのはなぜか。「マダガスカルでエイズ教育に取り組んでいた青年海外協力隊員の方の話を聞いて、自分にもできることをしたいと思ったんです」と、2年生の引野恵里花さんは話してくれた。

「生徒会に入って、世界には本当に深刻な問題があると知りました。いつか途上国行って自分の目で確かめてみたい」「将来はJICAで働けたら」「看護学校に進学して、世界の医療現場で働きたい」と、将来の夢を語る生徒会のメンバーたち。彼らが島根で続けてきた地道な取り組みが、世界を変える力となるだろう。



「島根県には何人のエイズ患者がいると思う?」。高校生の質問に、手を挙げて次々と答える小学生たち



〔右〕生徒会室での会議の様子。出張講座などでとっさの質問が来てもいいように議論を重ねる
〔左〕世界の実情や日本の現状について学習する年1回の合宿型のリーダー研修が、日々の活動の基礎になっている

世界とつながる 教室

女子高生が伝える 世界の課題

地元の子どもたちに、HIV／エイズで苦しむ人たちのことを伝えたい―。松江市立女子高等学校は約20年、生徒会のメンバーを中心に出張講座などを通じて普及活動が続けている。

質問タイムに「フェアトレード商品はどこで買えるんですか?」と聞く小学生

市内の小学生と エイズについて考える

ちらちらと雪が降り始めた12月初旬の昼下がり。島根県の松江市立母衣小学校に、制服姿の女子高生6人がやってきた。松江市立女子高等学校の生徒会執行部のメンバーだ。いつもと違う「先生たち」に、今から何が始まるのだろうと、6年生が大きく目を見開いて待っている。

彼女たちの目的は、HIV／エイズについて伝えること。この日のために台本をつくり、リハーサルをして、何カ月も準備してきた。限られた時間の中でいかに子どもたちの心に響く話ができるか、腕の見せどころだ。

「エイズって聞いたことがありますか?」

体育館に集まった約80人に向かってそう切り出したのは、2年生の石川涼子さん。石川さんたちは、HIV／エイズに関する基礎知識や感染ルート、予防方法などについて、小学生にも分かりやすい言葉で説明できるように勉強を続けてきた。

「開発途上国といわれる国々では、皆さんと同じくらいの年齢の子どもたちがエイズに感染し、亡くなっています。お金がないためにご飯を十分に食べられず、学校にも行けず、その代わりに

働かなくてはならない子もいるんですよ」。今回初めて小学生向けの講座を体験した1年生の福代沙希さんは、少し緊張しながらも、世界の子どもたちの過酷な状況を懸命に伝えている。

「子どもなのに働かないといけないなんてひどい」「苦しいことばかりでかわいそう」。あちこちからそんな声が聞こえてきた。

青年海外協力隊員の話に 心を動かされて

授業の後半は、クイズコーナーだ。「日本にいても、途上国の子どもたちを助けられる方法があります。このマークを知っていますか?」

手にしているのは、フェアトレード商品を表すマークだ。「あ、見たことある!」と元気な声。そのマークがついた商品を買うことで、途上国の生産者たちをサポートできる。しかも、近所のスーパーや百貨店で買えることを知った子どもたちは、「お母さんに話してみよう!」「今度絶対買う!」と目を輝かせていた。

授業終了後、子どもたちに握手を求められた高校生たち。「準備は大変だったけど、伝えられた」という実感が持てました。もっと勉強して、もっとたくさんの人に伝えたい」と口をそろえて話してくれた。生徒会のこうし

出張講座で訪れた高校から届いた感想文。「エイズのことが分かった」「フェアトレード商品を買ってみたい」と紙いっぱいに書かれている

